
八百万ってたくさんって意味らしい

くずもち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

八百万ってたくさんって意味らしい

【Nコード】

N3882BA

【作者名】

くずもち

【あらすじ】

変な爺さんに妙なものを押し付けられた。

なんでも魔法が使えるようになったらしい。

その上異世界に誘拐されるという珍事に巻き込まれてしまったのだからたまらない。

ばかばかしいとは思いつつ紅野 太郎は実際に魔法を使ってみることにした。

この魔法、自分の魔力の量がわかるらしいんだけど……ちょっとばかり多すぎじゃないか？

異世界トリップものです。

主人公最強ものなのでご注意ください。

プロローグ（前書き）

初めまして&お久しぶりですくずもちです。

ファンタジーもの初めました。

オリジナル物書こうとしたら、頭の中こんがらがってきますね。

つたない文章でまったりと行きたいと思えますのでよければどうか
よろしく願います。

暇つぶしにでもなれば幸いです^^

プロローグ

深々と雨の降りしきる空。

力のない瞳で老人が一人、自室の窓から静かに雨粒を見上げていた。
ひんやりとした空気は、体温を少しずつ彼から奪ってゆく。

同時にそれは、彼に魂が抜け落ちていくような錯覚を覚えさせていた。

「もうすぐ終わりなの……」

そして一人、彼はその感覚に身をゆだねながら呟くのである。

髪は白く草臥れ、蓄えた自慢の髭にもすでに艶はない。

顔色からは生気がまったく感じられないことだろう。

何とも情けない話だと自嘲気味にほほ笑んだ。

彼の命は今まさに、この辺境の小さな小屋で終わりを迎えようとしていた。

振り返ってみれば長くも短い生涯だったと物思いに更ける。

幸い、その時間だけは十分にあった。

彼はさる王国に使える魔法使いだった。

高い魔法の素養のあった彼は、幼い時から魔法を学び、さらなる高みを目指して世界を廻る旅をした。

その旅の途中ある国に属することになった彼は、高い魔力故に生きた数百年という長きに渡り、魔導の道を邁進し続けたことで有名だった。

結果的に優れた魔力は国を栄えさせるために大きく貢献した事は間違いないだろう。

その過程でいくつもの魔法を研究し、彼の英知は神にさえ届いたのではと噂された。

後進達の指導をし、国を導く守り手も育て上げることが出来たと自負している。

やれることはやった。

人生に悔いなどない……とは言い切れないが、満足出来る基準は満たしていると、床に伏した今なら割り切れもした。

思えば魔法一筋の人生だった。

そして魔道の探求も、彼自身納得の行くところまで達する事が出来たとうぬぼれではあるかもしれないが、満足もしている。

ただ、このままではあっけない幕切れであるとは感じていた。

まだもう少しはあると思われた寿命は、戦争で受けた他愛ない古傷

によつて、肉体的な死を迎えつつある。

となれば、とるべき道など限られるだろう。

こうなれば残り少ない人生を捨ててでも、己が生涯を懸けた魔導にこの命すら捧げてみせよう。

決心するまでに、そう時間はかからなかった。

それから彼は国の者達に別れを告げ、この人里はなれた山奥にやってきた。

目的は一つ、最後にして究極の研究を成し遂げるためだった。

そしてその成果が今まさに形を成そうとしている。

間に合った。

万感の思いを込めて彼は瞳を閉じた。

「魔法陣の動作確認……同時展開。……世界の番人よ、その門を開け。我が願いを聞き届けろ。究極にして至高、我が生涯すらも飲み干す魔法を今ここに……」

床に伏したまま、彼は祈る。

ただ切に、最後の魔法の完成を。

魔法は彼のすべての命を吸い上げ、燃やし尽くすだろう。

しかしそのことに一辺の悔いも残すつもりなどなかった。

百凡の人間がいくら集まろうが到底なしえないであろう至高の魔法を持って、すべての魔力を解き放つ。

老魔法使いを中心に、大地に刻み込まれた魔法陣が数キロに渡って光を灯し、天すら埋め尽くす記号の群れが、光を空へと運んでゆく。

光は空を割り、扉を開くだろう。

こうして老魔法使いの。

彼の生涯は幕を閉じた。

そして魔法は完成する。

彼の願いと共に……。

プロローグ（後書き）

というわけで初めて見ました。

二次創作で書いてみたことはあるんですが、今回はオリジナルです。

一話

「……なんだか半生を偉そうに語られた気がする」

変な夢で目が覚めた。

しかし目が覚めたという割には感覚がはっきりしなかった。

そして、まずここがどこだかわからない。

右を向いても左を向いても、見たことも聞いたことも、ついでに言うなら床すらない七色の？　ともかく謎と言うのがなによりぴったりに来る空間なのだ。

そんな謎空間にふわふわと浮いている。

なのこれ、意味わからん。

「……」

「……」

そしてなにがおかしいって、目の前にいるこいつがおかしい。

見知らぬ半透明の爺さんが浮いていた。

しかも鼻がくつつきそうな至近距離でだ。

「なんなんだこの状況……」

はつきり言って悪夢である。

しかも現状指一本動かせないとすれば、もうため息しか出てこなかった。

「……夢じゃよ。ここはお前さんの夢の中じゃ」

「そうか……嫌な夢もあったもんだな」

うんざりと吐き捨てるように言う。

どうやら口だけは利けるらしい。

だが肝心の話し相手は、口を開いてもとことん意味不明だった。

それでも俺は何とか目の前の爺さんを理解しようとかんばってみたんだ。

それしか出来なかったとも言っ。

見た目は長い顎髭に、ローブ姿という、いかにも魔法とか使ってきそうなデザインの爺さんだ。

しかしどこか目が虚ろで半透明なのが特別気にかかった。

はんとうめいである。

というかなんで半透明？ 近所のネコだってもうちちょっと存在感があるぞ。

俺はさっそく匙をあさつての方向に放り投げた。

わかるわけねえし。

俺、紅野 太郎は何の変哲もない大学生である。

そもそも、ついさっきまで大学で講義を受けていたはずなのだ。

まあ少しばかり夢の世界に旅立っていたことは否定しないが……と
もかく授業を受けていたことだけは間違いない。

それなのに、今は七色に輝く不思議な空間でジジイといっしょに漂
っている。

ひょっとしてあれか？

ちよつと閃いた。

守護霊とかいうやつ。

これは居眠りした俺に、先祖のじいさまが夢枕に立ってお説教しに
駆けつけてくれたんじゃないだろうか？

だとすればここは一つ、謝罪でもしておかねばならないだろう。

「これはこれはご先祖様。申し訳ありません。私めは授業中に居眠
りなどしてしまいました。

正直に告白し、今後こういったことがないように反省いたしますので、どうか成仏してくださいませんか？」

「……わしゃ、別にお前の先祖の爺さんじゃないんじゃないの？」

誠心誠意頭を下げたというのに、爺さんは気まずげにそう言ってきた。

どうやら早とちりだったようだ。

「ああ、そうなんだ。いや、たしかに変だとは思ったんだ。顔も見なかったし」

「……適当なやつだなー」

「よく言われるけど、長所だと思ってる」

「どうなんじゃろそれ？」

呆れて首をかしげる爺さんに、俺は自信満々に頷いておいた。

「まあそれはいいよ。ところでここが夢ってことは、ようは目が覚めればいいんだよね？」

気楽にそう尋ねると、爺さんは予想に反して首を横に振った。

「……いや、残念ながらこの夢は覚める事はないじゃろっ」

「……なんで？」

「まあ戸惑うのも無理はないがのう。だがこれはすごく幸運なことなんじゃよ?」

「いや、さすがにふざけるなと」

覚めない夢など死んでいるも同然じゃないかと思うのだが。

しかもセクシーな美女とならともかく、こんな幽霊爺さんと永遠に夢の中などごめん被るりたい。

趣味の悪い冗談と言うのならまだよかったが、爺さんはそんな風でもなかった。

「正確に言うなら、今のおぬしは我が魔法の術中におる」

「ならさっさと出せよ」

「……せつかちな奴じやのう」

不満そうに口をとがらせる爺さんはともかく、何ともファンタジーな台詞に俺もまた一層うんざりしていた。

魔法だと?

何を馬鹿なという感じである。

格好が魔法使いっぽいからって、そんな設定まで凝らなくてもいいと思う。

ただ本当に頭が痛いのは、実際おかしいことになっているのも確か

だということだろう。

「魔法……はともかく、なんの目的でこんなことを？」

とにかく現状を打開する方法を目の前の爺さんなら持っているだろうとそう希望も込めて尋ねてみたのだが、いきなり爺さんは真剣な面持ちで力強く宣言した。

「単刀直入に言おう、わしの世界に来てもらう！」

「え？ 嫌だけど？」

即答したら、爺さんはちよつと涙目になった。

「……そんなすっぱり断らなくても」

「いや、断るでしょうよ。俺、今花のキャンパスライフ真つ最中よ？」

あつさりと俺はそう付け足させてもらった。

こちらら春に入学したばかりの新入生なのだ。

つらく苦しい受験勉強が終わり、ようやくと束縛から解放されたというのに、なぜ故にこんな不思議爺さんの戯言に付き合わねばならないのかと。

否、付き合う理由など欠片も見当たらない。

だからきつぱりと拒絶したことで諦めて欲しかったのだが……。

爺さんは諦めるどころか「残念じゃのう」と自分の髭を扱きながら、にやりと何とも不敵に笑いやがったのである。

「ふむ……実はものすごい特典も用意しておるんじゃないが？」

「……一応聞くだけ聞いてみるけど。なに？」

「うむ、我が魔力をお前にやろうと思っておる！」

「なにそれ、いらない」

再び即答すると、爺さんはものすごく落ち込んだ。

「そんなばかな……。わし、世界でもっとも高名な魔法使いなんじゃよ？」

その魔力をいらんじゃないかと？」

そんな焦点の合わない眼で呟かれても困ってしまうのだが。

「いや、そもそも魔法とかわけがわからないし？ 存在しないものをもらっても？」

はつきり言ってそんなもの、通販の幸運グッズ位うさん臭い。

速やかにお断りしつつ、一応お年寄りということもあって懇切丁寧に説明すると、どういいうわけか爺さんは大いに驚き、目をむいていた。

「なんと！ こちらの世界には魔法がないのか！ 不便な世界じゃ

のう！」

「いやいや、そこなのか驚くところは？ 全然不便じゃないし。魔法がある方が不条理だと思うよ？ 科学的に考えて」

「ふむ……科学とやらがどういうものかは知らんが、それは魔力を使わぬ力なんじゃな？ しかしおかしいのう。お前さんからは並外れた魔力を感じるんじゃないが……」

「そうなの？」

半ば適当に話を合わせていたのだが、気になる台詞があったので反応してしまった。

すると爺さんは俺の言葉に必要以上に食いついて、力強く同意してくれた。

「そうとも！ でなければわざわざ出向くわけがあるまいよ？」

「いや……そもそもあんた何のためにここに来たんだよ？」

俺は爺さんから何か貰えるようなつながりはないと断言できる。

本音を言わせてもらえば早々に終わらせて、早く帰って欲しいのだけれど。

だが爺さんは露骨に肩を落としてため息をつく、何やら語り始めたじゃないか。

なんだかまた時間がかかりそうだと俺は確信した。

適当に聞くのが吉だな。

「……それはのう。これはわしの我儘なんじゃよ」

「ほう」

「わしはな？ とある世界で魔法使いをしておったんじゃ」

「ふむ」

「そして人並みはずれた魔力と長年の鍛錬の結果、世界で類を見ないほどに強力な魔法使いとして尊敬を集めておった」

「へえ」

「自慢ではないが、我ながらものすごく自国に貢献してきたと思う。しかし、そんなわしにも死期が訪れたのじゃ」

「……それはお気の毒に、ちなみに何歳くらいだったの？」

「ぴつちぴちの500歳じゃ」

「……十分すぎるよ。天寿を全うしているよ」

「む！ おぬし何気に酷い子じゃのう。まあそういうわけで、わしは死んでもうたわけじゃな」

「……愁傷様でした」

「……なんか受け答えに適當さを感じるんじゃない？」

「気のせいでしょ。被害妄想乙」

「そうかの……？ では続けるが。しかしだ！ わしは死ぬ直前に、ある魔法で自分の魂をこの場所へ飛ばしたんじゃないよ！」

「……なんでまた？」

聞かない方がいいかなとは思ったんだ。

思ったんだけど、流れで聞いてしまった。

すると遠慮なく爺さんはぶっちゃけた。

「だって……せっかく鍛えたのにもったいないじゃろ？ 魔法もすごい沢山覚えたんじゃし？」

「いやいやいやいや。それこそ俺の知ったことじゃないだろう」

あきれてものも言えないとはこのことだ。

そんなもん他所やれと。

主に俺に迷惑のかからないところで。

「まあそう言わずに。残念じゃが弟子達もわしほどの器はなかったんじゃないよ。」

最後の魔法も伝えられんでのう。だからわしは死ぬ直前にすべての魔力を振り絞って、わしの魔法と魔力を受け継ぐ素養のあるものに

すべてを託そうと考えたわけじゃ!」

えっへんと、このあたりになってくると入れ歯でも飛ばしそうな興奮具合だった。

同時に俺との温度差もすごいことになっていたが、その辺りはどうでもいいらしい。

「それで俺のところに来たと……わざわざ異世界から」

「その通りじゃ! お前さんを探し出すのには苦労したんじゃよ?」

何ともめちゃくちゃな話に思えるのは俺だけだろうか?

しかし爺さんは、自分のやったことにむしろ誇らしげだというのがいつそう始末が悪い。

だがその内容事態は少し意外でもあった。

爺さんが俺のところに来たのは、俺自身にも原因があるらしい。

顔立ちこそ少しハーフっぽいなんて言われる俺だったりするが、黒い髪も瞳も何の変哲もない日本人の基準からそう大きく外れてはいない……と思う。

背丈も普通だし、そんなに目立つ方でもないだろう。

そんな俺に魔力なんて面白スキルがあるというのがまず初耳だった。

「……俺に魔力ねえ」

ひょっとして俺って伝説の勇者の生まれ変わりだったとか？

……なんて面白い妄想を考えてみたりして。

うん……ないな。

だいたいそれならそれで面倒くさそうだ。

「うむ！　そういうわけで、おぬしは自らの魔力とわしの魔力を併せ持った、文字通り最強の魔法使いへと昇華するわけじゃな！　これぞ我が願い！　わしすらも届かなかった高みへと遠慮なく駆け上ってくれい！」

爺さんは話をとても偉そうに締めくくると、そのまま期待に満ちた目でチラチラと俺の様子を伺っているようだった。

「……」

話はしっかり聞いた。

聞いたうえで考えれば、おのずと答えは見えてくる。

「帰れ」

「なぜに！」

涙目で俺に詰め寄ってくる爺さん。

がつくんがつくん首を振られても、俺の答えは変わるわけがない。

「いやだって、そんな魔法とか言われても正直引くし」

「引くって君ね！ 異世界からわざわざ来た老人を追い返すかの！
普通！」

「いや、だから俺となんも関係ないよね、それ？ ものすごく面倒だし」

「むむむ、言いよるのう……だがもう遅いんじゃないよ。言ったである？ これはわしの我儘じゃと」

突然俯き、しかしどこか悪い笑顔の爺さんに何やら嫌な予感がした。

爺さんは最初なんと言っただろうか？

確かこう言わなかったか？ この夢は覚めることがないと……。

「……あんたまさか」

「そのまさかじゃ！ 無理矢理でも行ってもらうぞい！ もはや後戻りなど出来はせん！ この夢から目覚める時！ おぬしは強制的にわしの世界に転移することになるじゃろう！」

ビシッと爺さんは本当にろくでもないことを目一杯宣言してくれたのだった。

どうやら一連の説明は前ふりのようなもので、結局俺は異世界とやらに引きずり込まれるらしい。

「……誘拐じゃんか」

「知らんもん！ わしはこれから死んでしまっじゃもん！ そんなの知ったこっちゃないわい！ せつかくだから快く旅立ってもらおうと思っただが、もう知らんもんね！」

「この爺め……開き直りやがった」

それはもう見事な、駄々っ子も真つ青な開き直りっぷりだった。

呼びとめようと手を伸ばすが、爺さんは素晴らしい速さで遠ざかってゆく。

そしてどこからか漏れ出る神々しい光の中にゆっくりと溶けていった。

わざわざさわやかな笑顔でこちらに手を振りながらだ。

「じゃ！ 良い異世界ライフを願っておるぞ！ よかったのう！ これでいきなり世界最高の魔法使いの誕生じゃ！ おぬしの完成した姿が見られんのが残念じゃ！」

「聞いてない！」

「ちなみに役に立ちそうなわしの魔法も最低限無理やりぶち込んでやるから安心せい！ 存分に使ってやってくれい！ ……まあ、生きておればじゃが？」

「だから聞いてないって……何その補足！ 怖いんだけど！」

「では幸運を祈る！　なるべく死ぬなよ！」

「祈るな！　というか死ぬかもしれないのか？！　そこんところはつきりしてくれえ！」

俺の叫びはむなしく木霊するのみだ。

健闘空しく、爺さんはすこぶるいい笑顔で成仏していったのだった。

「なんだったんだいったい……」

結局七色の空間に一人取り残された俺。

どうしようもなく、ただただ啞然とするしかない。

「……あの爺さん、勝手な事ばかり」

爺さんの言葉を丸ごと信じるなら、俺はこれから異世界とやらに行かなければならないらしい。

「……はあ、脱出方法もわかんないし、強制ならどうしようもないか」

途方にくれながら、ぼんやりと呟く俺。

残念ながら爺さんの言う通り、異変はすぐに表れる。

俺は意識がどこかに流されていくような不思議な感覚を味わっていた。

全部夢でありますように……。

そう祈りながら
されたのである。

紅野 太郎は不本意だが異世界へと旅立出

実に不本意だが。

大事なことなので二回言いました。

二話

「んあ……」

なんだか肌寒い。

俺が再び目を開けると、いつの間にか見知らぬベッドに寝かされていた。

中途半端に生暖かいベッドの中はなんだかじいちゃんっぽい匂いがある。

「……ここはどこだろう？」

ぼんやりと呟き、声に出してようやく頭が回り始める。

俺は布団から飛び起きたが、ズキリと頭が痛んで、ぼさぼさの黒い毛をくしゃりと抑えた。

「いたたたた……。なにがあつたんだっけ？」

寝すぎた後のように頭が痛い。

その他には怪我もないようだが、ふわふわと体の感覚はまだ頼りなかった。

「うわ……ほんとにどこだよこー」

そしてなにより部屋の窓から外を眺めて、俺は驚きの声を上げた。

見知らぬ森が広がっている。

斜面が多い所を見るとどうやらここは山の中らしい。

そのせいか妙に肌寒く、体に染み入ってくるような冷気が漂っていて、俺はブルリと身を震わせた。

ただその震えは、必ずしも寒さのせいだけではないのかもしれない。

「……夢じゃなかった？」

先ほどの不思議な夢を思い出して、俺は何とも気の抜けたため息を吐き出した。

どうにも現実味がない。

だがこのわけのわからない状況その2も、やはり原因はあの夢くらいしかない思い当たる節はなかった。

「どうなってんだか。ありなのかね？　こういうのも？」

あえてポジティブに考えるなら「こんなゲーム染みたイベントに巻き込まれた俺すごくね？」とか？

……しまった、全然歓迎出来ない。

まあでも、こうなってしまったものはしょうがないか。

人間諦めが肝心である。

それよりも今は、現状把握が最優先だろう。

俺は今いるこの家を、とりあえず家探しすることに決めた。

整然とした室内には、まだ人の気配が残っている。

それは埃の積もっていない床だったり、まだ食べられそうな食料だったりするのだけれど、しかし実際に人がいる様子はなく、物音一つしなかった。

「……それにしても殺風景な部屋だな」

感想を口にしながら手当たり次第に部屋をあさってみる。

時間を費やすこと一時間ほど。

結局人っ子一人見つけることは出来なかったが、唯一の成果は最初にいた部屋にぽつんと置かれた一通の手紙だった。

「……あやしい」

しかしこの手紙、ものすごく胡散臭い。

俺は口元に手を当てて、手紙を眺めながら唸る。

さてどうしたものか？

恐る恐る手に取って眺めてみるが、宛名らしきものはない。

しかし差出人は十中八九あの爺さんだろう。

開けるべきか、無視するべきか。

しかし何の手がかりもないのはわかっているのだ。

結局俺はそれを開けるしかなかった。

封筒から二つ折りにされた手紙を取り出すと、手紙には見たこともない記号が書かれていた……のだが。

「……見たこともない文字なのに読めるな」

不思議なことに内容が理解出来てしまうのだ。

こうあっさりとわかりやすい異変が体に起きている以上、本当になにかされてしまったらしい。

やってくれる。

心の中で毒づくが、しかしこの際便利なので良しとしておこう。

肝心の手紙には「遺言」と書き記してあった。

「遺言か……ってことはやっぱりあの爺さんだよな」

たしか死んだと言っていたし。

だがしんみりする時間すらも俺には与えてはもらえなかった。

「ぬおう！」

思わず悲鳴を上げる。

本文を読もうと折り曲げられた手紙を開いたら、いきなりマグネシウムを燃やしたみたいな閃光が俺の眼球を直撃したのだ。

目がシバシバする。

痛む目を抑えながら、とんだトラップに俺は一瞬でも爺さんに同情した自分を悔やんだ。

「ぐおおお、おのれ目が……あの爺さんホントろくなことしないな！」

数秒して、ようやく光が収まったらしい。

頃合いを見計らって瞼をゆっくりと開くと、溢れた光が小さなビーチボールくらいの大きさで手紙の上に浮いていた。

そして光からぼんやり映像が浮かび上がってきたのだ。

3D映画も真つ青である。

しかも映し出された人物はそのまましゃべりだした。

『この手紙を読む者へ。これを聞いているということはおそらく召喚は成功したんじゃないだろう。』
気分はどうじゃね？』

「……最悪だよ爺さん、つつかさつき話しとけよ」

もう一度この顔を見ることになるとは思わなかった。

それは間違いなくあの爺さんだった。

いつそ手紙ごと床に叩きつけたい衝動に駆られたが、今は貴重な情報源だ、我慢する。

少しばかりイライラしながら続きを待っていると、爺さんは淡々と用件を語りだした。

『それではさっそく君に与えた力の説明をしておこう。まず君は異世界の者でありながら、こちらの文字を理解出来た事に困惑していると思う。

これはわしからのプレゼントじゃ。

わし自ら調整した翻訳の魔法をかけさせてもらった。

これによって君はこの世界のあらゆる言葉を理解し、文字を読み解く事が出来るじゃろう』

ああ、だからさっき文字を読めたのか。

魔法便利すぎるだろう。

この魔法があれば俺も学校で補習を受ずにすんだに違いない。

それは置いておくとして、爺さんはいよいよ本題に入るようだった。

『そして、ここからがメインじゃ。君には全部で七つの魔法を吹き込んでおいた』

「たった七つかよ」

『たった七つかよ？　とか失礼な事思ったじゃろ？』

「……」

台詞予想するなし。

しかし七つか。

あえて七つに絞った意味が何かあるのだろうか？

すると爺さんはちゃんと説明も用意してくれていたようだった。

『だがこの七つこそ魔法の基礎にして、魔法を究めたと謳われる我が集大成でもある』

「ほう……って言うてもなあ、本当に大丈夫か？」

思い出されるのは夢に出てきた爺さんの人柄だった。

なんというか……何とも頼りないのだが。

『まあ心配せずとも大丈夫じゃ、まずは基本となる五大元素魔法の五つじゃな。』

この世のモノはおおよそ五つの元素より成り立っていると言われている。

それは「地」「水」「火」「風」「空」の五元素である。

七つの内、五つはその元素にそれぞれに対応した基本の魔法じゃ。

この五つの魔法がすべての魔法の基礎となる。

つまりこれを覚えておらねば、他の二つの魔法は使用も出来んというわけじゃ。

一般的には攻撃魔法や属性魔法などという品のない呼ばれ方をしておるので、身を守るのに使うのもよかるう』

「完全に会話を先読みされてる……なんか悔しい。五大元素ねえ、いよいよRPGとかカードゲームみたいだな」

実は属性とかそういう小技でちよつとわくわくした。

俺だって、TVゲームくらいならしたことがあるのだ。

『そしてもう一つは分析魔法。物や人を分析する魔法じゃな。

これを使えば人物の力量や、物ならばそれがどうやって構成されているかすら読み解く事が出来る。

つまりところ自分の知りたい情報を対象から引き出す魔法じゃ。

これを聞き終わってから、自分にこの魔法をかけてみると良いじゃろう。

驚異的な魔力量を見て驚くこと間違いなしじゃ！

ちなみに魔力量については、わしら基準でお前さんに理解できるよう魔法を調整しておる。

一般的な魔法使いを1として、わしは1000ほどじゃった。

それを上乘せたのだから、いったいどれほどになるか……楽しみじゃろう？

この値は、わしが設定した帝国標準の魔力値なので覚えておいて欲しい』

「結局自慢かよ。あれか要するに女の子のスリーサイズも計れるわけだな？ エロ魔法か」

『エロいのはおぬしの頭じゃ』

「……ホントにただの録音かこれ？」

そして映像の爺さんは最後に黙り込み、セリフを無駄にためる。

いい加減じれ始めた頃、おもむろに空気を作りながら語りだした。

『そして最後に……これぞ我が秘奥にして最高の魔法。心せよ。これぞ究極の魔法なり』

「お？ いきなり重々しい導入に入ったな？」

しかし究極とか最高とか大好きな爺さんである。

ただこれだけ自信満々なのだから、最後の魔法とやらにもちよつとだけ興味が出てきた。

もつともそんな興味はすぐにクエスチョンマークに変えられたが。

『最後の魔法、それすなわち魔法創造じゃ！』

どどーんと本当に効果音付きで爺さんは言った。

「無駄に演出に凝りやがって……」

俺はいえれば結局意味の分からないことを言われて首をかしげただけだったが。

「想像」？ いや「創造」かな？

と言うと魔法を作れるとかか？

だとしても、そんなもの作れたって何の知識もないのだからどうしようもないと思うんだけど？

そもそも魔法がなんなのかさえ怪しいのに。

当然のことながら、爺さんは俺に構うことなく続きを語り始めた。

『発想と魔力を糧に、世界より魔法を引き出す神技。そしてわしがおぬしをこの世界に呼ぶ事になった最大の理由でもある』

「へえ……そいつは迷惑な話だ」

『魔法とは、魔法使い達が少しずつ世界の秘密を解き明かして作り出した望む現象を起こす術だと言われている。過程を省いて結果を導き出すような、世界を歪める技こそが魔法なのだ。』

故に魔の法。誰が名づけたのかは知らんが、的を得ていると思う。その代わりに魔法使いは魔力を対価として世界に差し出す。

この魔法は、本来なら自ら解き明かさねばならぬ方程式を世界から直接引き出す魔法である』

うむ、わけがわからない。

『それは思いつきで魔法をすぐさま作り出せると言うことじゃ』

だが続く爺さんの台詞に、俺もなんとなくその凄さがわかってきた。

確かにそれは反則だろう。

そしてこの魔法さえあれば他にどんな魔法も必要ない。

なにせ、したいことがあれば出来る魔法を引っ張ってくればいいのだから。

こんなにうまい話はないだろう。

『ただしこの魔法には欠点があつてのう。

魔法を引き出す事、それ事態に恐ろしいほどの魔力が必要なのだ。簡単な魔法でも、生半可な実力では干からびることになるじやろう。難易度の高い魔法を創造しようとすればさらにコストは高くなる。

だからこそ、わしはこの魔法を弟子達に教えなかった。

もし教えていたのなら、魔法の深淵にたどり着くために弟子達は命も惜しまずにこの魔法を使い、そして死ぬ事になったじやろう。

しかし、今のおぬしなら……わしに匹敵する魔力を持つおぬしならば、修行次第ではさらなる魔法を引き出すことも出来よう。

出来る事なら、良心に従い、その力を有意義に使ってくれることを祈っておる。

ではさらばじゃ！』

一方的にしゃべり続けた爺さんの満足げな顔を残して映像は消えていった。

案の定、その魔法には何かしらのデメリットがあるようだった。

本日二度目のお別れだが、俺の頭にはどちらも演出過多な爺さんだったなあと見当はずれな感想が浮かんでいた。

「……なるほどね。恐ろしく勝手な爺さんだ。自慢したい気持ちはわからないでもないけどさ」

あの爺さん自身も、これは自分の我儘だと言っていたが、それは確かに我儘だったらしい。

最高の魔法をそのまま幻にしくなかつたから、俺を無理やり巻き込んででもこんな大がかりなことをやらかしたのだらう。

やり方こそ褒められるものではないが、その努力が並々ならぬものであったことは想像に難くない。

しかしまあ、それでも悔しかったはずだ。

こんな大層なものを他人にくれてやらねばならなかつたんだから。

そんな爺さんに俺はなんとなく黙祷を捧げておいた。

まあこれくらいはしておいてもいいだらう。

しばらくして顔を上げると、俺は気分を切り替えてせっかくだからその魔法とやらを試してみることにした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3882ba/>

八百万ってたくさんって意味らしい

2012年1月10日23時51分発行